

# The Japanese Association of Special Education Newsletter

一般社団法人  
日本特殊教育学会

「とつきよう」ニュースレター

No.009

## Contents

- 第64回大会準備委員長からのメッセージ
- 第63回大会準備委員長からのメッセージ
- 第63回大会フューチャーリサーチアワード  
受賞者のコメント
- 第63回大会大会企画特別講演・シンポジウム報告
- 研究奨励賞・実践研究賞受賞コメント
- 編集後記

2026年3月4日発行  
一般社団法人日本特殊教育学会  
理事長 澤隆史  
〒305-0005  
つくば市天久保 2-20-7 レガートホンダ 203  
tel 029-851-7778 (平日 09:00~16:00)  
url <https://www.jase.jp>



# 第64回大会準備委員長からのメッセージ

## 第64回大会開催に向けて

井澤 信三 (兵庫教育大学・第64回大会準備委員長)

日本特殊教育学会第64回大会は、兵庫教育大学が大会準備校となり実施することとなりました。日時は、2026年9月19日(土)～21日(月・祝日)の3日間、会場は、神戸国際会議場をメインとし、隣接する神戸商工会議所(徒歩3分程度)を併用する形となります。

今回の大会準備委員会のメンバーは、兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻の教員が中心となります。本専攻は、障害科学コースと発達障害支援実践コースの2つからなり、大学院にて特別支援学校教諭免許状(5領域:視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、知的障害、病弱)が取得できるようになっています。専攻のスタッフが専門とする「障害」は多様であります。かつ、研究分野の幅広さ、多彩さもウリのひとつとなっていると考えていますので、これらのことを大会でも活かせたらと考えています。また、本学の場所は、兵庫県加東市のキャンパスが本体になりますが、神戸キャンパス(新長田駅近く)もあります。本専攻のある「加東」キャンパスは神戸からちょっと離れていますので、アクセスのよい「神戸」でとなりました。

さて、本学が本学会の大会準備委員会を担ったのは、遡ること、2007年(平成19年)9月の第45回大会となります。藤田継道先生が大会準備委員長となり、今回と同じく神戸国際会議場と神戸商工会議所にて実施しました。私もスタッフの一人として参加しましたが、その盛況ぶりは今でも記憶しています。その大会は、2007年4月から「特殊教育」が「特別支援教育」制度に転換され、本格的に実施されたことから、いわゆる「特別支援教育

元年」といわれる年度でありました。そこから「今」につながる特別支援教育の変化・変容、発展(拡大・深化)に至っています。それは、これまでの先人の努力を礎に、その時々の流れの中で多くの人が多くの人々のいろいろなことをつないできた「成果」であると思います。そして、前回大会からちょうど20年目となるこの年に、これまでの特別支援教育を振り返り、新しい特別支援教育の「未来」を探り出す、そのような意味を込めて、大会テーマは「特別支援教育のこれまでとこれから～未来をえがく・つくる・かんがえる～」としました。大会の概要としては、例年通り、特別講演(シンポジウム)、学会企画・大会企画シンポジウム、自主シンポジウム、研究発表等を予定しています。現在検討中ですが、企画内容等は決まり次第、大会HP等にてお知らせしていきますので、よろしくお願いいたします。

阪神・淡路大震災から31年がたちました。現在、三宮駅周辺の再開発がすすめられています。お肉・お魚、和食・洋食・中華、洋菓子・和菓子、珈琲、日本酒、ワインなど「おいしいもの」がたくさんありますので、「兵庫」を楽しんでいただきたく思います。なお、大会開催日は、秋の5連休の最初の3日間となっていますので、いろいろな意味で早めの大会参加へのご予定、ご準備をお願い申し上げます。私たちスタッフ一同、気を引き締めて、有意義な大会になるよう取り組む所存です。どうぞ、みなさまのご参加、ご発表を心よりお待ちしております。

# 第63回大会準備委員長からのメッセージ

## 第63回大会のお礼

勝二 博亮 (茨城大学・第63回大会準備委員長)

2025年9月13日(土)～15日(月・祝)に水戸市民会館で開催されました日本特殊教育学会第63回大会(水戸大会)には、2000人を超える多くの参加者にご来場いただき、盛況のうちに終了いたしました。大会運営にご協力いただいた関係各所の皆さま、ならびに学会員の皆さまに心より御礼申し上げます。

今回の大会では、「つながる・超える・生み出す：新しい特別支援教育を目指して」をテーマに掲げ、大会準備委員会としては、さまざまな領域の方々をつなぐ特別講演、7つのシンポジウム、そして5つの教育講演を企画させていただきました。さらに、ポスター発表は600演題を超え、自主シンポジウムは116件を受け入れることができました。

すでに、大会前より告知しておりましたように、会場の水戸市民会館は、キャパシティの制限があり、コンパクトな大会運営を行いました。これは一つの挑戦でもあり、近隣に国際会議場のような大きな会場をもたない大学でも主催可能な大会の在り方を模索したものでした。そのため、大会の開始時刻を早めたり、90分を一つの時間的まとまりとして回転率を高めたりするなどの工夫をいたしました。ポスター発表では、従来の前半と後半に分けた発表においてルールが十分に守られないケースが多いとのご意見を受け、広いスペースを確保して一度に発表できる形式といたしました。自主シンポジウム

においては、あらかじめ部屋の大きさの希望をとり、スペースとのミスマッチを減らす工夫を行いました。さらに、大会準備委員会ではシンポジウムや教育講演を多く企画し、各種イベントが同時開催されることで参加者の分散も試みました。また、大会期間中に参加者の皆さまに楽しんでいただくため、福祉機器の展示や茨城大学にゆかりのあるお店の出店も行いました。

このような初めてのチャレンジにより、違和感を覚えた参加者も一定数おられました。しかし、多くの参加者においては、今回の大会の意図をご理解いただき、好意的な意見も多くいただきました。とりわけ、会場に関しては、キャパシティの小ささが移動の負担を軽減した点が評価され、好評でした。さらに、会場内には休憩するスペースが数多く存在し、研究交流が活発に行われたと聞いております。総合すると、概ね好意的なご意見が多かったとの印象を持っております。

以上のような反省点を次回大会に引き継ぎながら、今後のよりよい大会運営につなげていければと思います。最後に、大会の運営には、多くの方々の協力なしには成り立ちません。一方で、大会にご参加いただく皆さまのご協力も不可欠です。これからも大会にご参加いただく皆さまにおかれましては、大会ルールの順守にご協力賜りますようお願い申し上げます。

## 第63回大会フューチャーリサーチアワード受賞者のコメント

### 第63回大会フューチャーリサーチアワードを受賞して

馬見塚 優也 (東京学芸大学教育学研究科)

この度は、日本特殊教育学会第63回大会フューチャーリサーチアワードに選出いただき誠にありがとうございます。貴重な時間を割いて発表を聴いてくださった皆様に、心より感謝申し上げます。また、ご指導いただいた鹿児島大学教育学部の雲井未歎先生、ならびに研究にご協力いただいた中学校の先生方と生徒、保護者の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今回の研究は、通常学級に在籍する中学生を対象に、英単語綴り低成績の継続に関連する要因について検討したものです。英語学習においては、英語特有の音と文字を対応させて理解することが重要であるとされていますが、こうした音と文字の対応の理解は、多くの子どもたちにとって容易ではないと考えられます。そのような困難は、英単語綴り課題の低成績として顕在化する可能性があります。

中学生の英単語綴り課題の低成績については、ローマ字綴りの未達成が高いリスク要因となることが既に報告されています(銘苅ら、2015)。また、英単語綴り低成績の背景には、学習経験の不足によるものと、それ以外の要因によるものが存在すると考えられます。前者の場合、綴りの学習経験を積み重ねることで成績の改善が期待できますが、後者の場合には、学習経験を重ねても改善が難しい可能性があります。英単語綴りの低成績が継続する生徒に対しては、その背景にある困難を早期に把握し、適切な支援につなげることが重要であると考えました。そこで本研究では、英単語綴りの低成績に着目し、とりわけ綴り低成績が継続する背景要因について検討することを目的としました。

本研究では、通常学級において一斉実施が可能な読

み書きアセスメントの結果を分析しました。その結果、漢字読みテストの成績が、英単語綴り低成績の継続に関連する要因である可能性が示されました。具体的には、中学1年生の時点で、英単語綴りテストと漢字読みテスト両方において低成績を示した生徒は、その後2年間にわたり英単語綴りの低成績が継続する傾向が認められました。また、漢字読みテストが一定水準を下回った場合には、漢字読みテストの低成績かどうかに関わらず、継続する英単語綴り低成績のリスクが高まる可能性が示唆されました。

これらのことから、生徒の読み書きのスキルを、日本語と英語の両側面から捉えることで、英語学習における困難の背景をより具体的に把握できる可能性があります。本研究の成果は、直ちに教育実践へ適用できるものではありませんが、英語学習における支援の在り方を検討するための基礎的知見として活用いただければ幸いです。

末筆になりますが、本大会では多くの先生方から貴重なご助言を賜り、自身の研究の課題や面白さを改めて認識することができました。また、受賞の機会を与えてくださいました大会準備委員会の皆様にも、深く感謝申し上げます。発表を通して得た学びをもとに、英語学習に困難を示す子どもたちに対する予防的・早期的支援の充実に貢献できるよう、研究に励んでいきたいと思っております。この度は、誠にありがとうございました。

**発表演題：中学生における英単語綴り低成績の継続に関連する要因の検討**

通常学級における読み書きアセスメント 2 年分の分析から

## 第63回大会フューチャーリサーチアワードを受賞して

浜野 陽香 (筑波大学人間総合科学学術院人間総合科学研究群障害科学学位プログラム)

この度は、日本特殊教育学会第63回大会フューチャーリサーチアワードにご選出いただき、誠にありがとうございます。審査して下さった先生方、指導教員の米田宏樹先生をはじめ、これまでご指導くださった先生方、研究室の先輩・同輩、そして何より研究にご協力くださった学校の先生方に厚く御礼申し上げます。また、ニュースレターに研究概要を紹介させていただく機会をいただきましたことに感謝申し上げます。

それでは簡単に、本研究の概要をご報告させていただきます。

### 1. 研究の背景と目的

近年、通常の学級に在籍しながら通級による指導を受ける児童生徒数は増加の一途を辿っており、通級による指導はますます重要度が高まっています。対象児童生徒の多様化が進む中、通級による指導の担当教員（以下、通級担当教員）には高い専門性が求められる一方で、各校における担当教員の配置数は少なく、孤立しやすい環境にあります。そうした中、通級担当教員同士の連携が指導技術の向上や精神的サポートの観点から極めて重要です。先行研究においても、連絡会等の設定が指導への示唆を与える可能性が指摘されています（北浦・吉岡、2022）。そこで本研究では、行政資料の分析（調査1）および通級担当教員への質問紙調査（調査2）を通して、連携の機会や内容の実態を明らかにすることを目的としました。

### 2. 調査1：研修要項等の分析

都道府県教育委員会が作成した研修要項並びに通級による指導に関する手引書を対象に、どのような連携や研修の機会が設けられているかを整理しました。20都県の資料を分析した結果、研修は「講義」「協議会・実践発表」「演習・事例検討（他校・自校）」「相談会」の大きく5つの形態に整理されました。多くの自治体で小中学校教員向けの研修が設定されていましたが、障害種別（言語障害等）に特化した専門的な研修や、自治体独自の連絡会が明記されているケースは一部に留まりました。また手引書の分析からは、現職の通級担当教員との連携の他に、OJTによる後継者育成や前任者との連携が推奨されている実態が確認されました。

### 3. 調査2：連携実態に関する質問紙調査

通級指導教室一覧が公開されている5県の小中学校の通級担当教員を対象に、連携の実態やニーズを尋ねる質問紙調査を実施しました。回答が得られた49名のデータを分析した結果、以下の傾向が明らかになりました。

- (1) 研修における連携の機能：研修は単なる知識習得の場に留まらず、教員間の連携を生む重要な機会として機能していました。具体的には、「講義」や「協議会」の場面では主に「教材・教具」の情報共有が行われ、「事例検討」の場面では「具体的な児童への指導法」の共有が多く見られました。また、「相談会」形式の場では、指導法だけでなく「通級の運営」に関する相談など幅広く行われており、研修形態によって共有される情報が異なることが示唆されました。
- (2) 自治体および日常的な連携：自治体主催の連絡会は多くの地域で実施されており、対面で集団にて行われているものが主流でした。これに対する通級担当教員の満足度は高く、定期的な情報交換の場として機能しています。また、自治体の枠を超えた連携や普段の日常的な連携も行われており、その多くは研修会での出会いをきっかけとしていました。
- (3) 担当教員数による違い：クロス集計の結果、自校に複数の担当教員が配置されている場合、一人配置の場合と比較して、日常的な連携の頻度や内容の割合が有意に高い傾向が見られました。特に教材教具の共有においてその差は顕著であり、身近に相談相手がいる環境が、日常的な実践の質を高める要因となっていることが推察されます。

### 4. 考察と今後の課題

本研究の結果、担当教員にとって「研修」は、他校の教員と出会い、関係性を構築するハブとしての役割を果たしていることが確認されました。特に経験年数の浅い教員や、特別支援学校教諭免許状を未取得のまま担当する教員も少なくない現状において、現職研修や日々の連携は専門性維持・向上のために欠かせないものであると言えます。また、複数人配置が指導の質向上につながる可能性が示唆された一方で、通級担当教員の複数配置を

全校で実現することは、制度的・人的資源の面から困難な側面があります。そのため、巡回指導方式の活用による教員集団の確保や、オンラインツールを活用した「気軽に交流できる環境」の整備、あるいは地域ブロックごとの小規模な事例検討会の充実など、物理的な距離を補完する多様な連携モデルの構築が求められます。今後は、本研究で得られた知見をもとに、新任教員支援や後継者育成に資する具体的な連携システムの提案へと研究を発展させていきたいと考えています。

#### 【引用文献】

北浦郁乃・吉岡恒生(2022) 小中学校通級指導教室の実態に応じた個別の教育支援計画の活用と通級による指導の今日的な課題—通級による指導に関わる教員への面接調査を通して—。障害者教育・福祉学研究、18、23-30.

発表演題：通級指導教室担当教員同士の連携の実態

—教育委員会の資料の分析及び教員への質問紙調査を通して—

## 第63回大会フューチャーリサーチアワードを受賞して

須原 朱音(茨城大学大学院教育学研究科)

この度は、日本特殊教育学会第63回大会フューチャーリサーチアワードに選出していただき、誠にありがとうございます。私の所属する茨城大学が主催する大会で、同大学のたくさんの仲間と囲まれる中、このような名誉な賞をいただいたこと、大変嬉しく思います。審査していただいた先生方、ご指導いただいた勝二博亮先生、田原敬先生、一緒に研究を行った茨城大学障害児生理学研究室の皆様、これまで研究を引き継いでくださった先輩方、並びに研究にご協力いただいたお子様、保護者様に心より感謝申し上げます。

今回の研究では、約10年にわたりコミュニケーション支援を続けてきた重度・重複障害児の意思表出行動がどのように変容したかについて、自身の好きな楽曲を選択する活動を通して検討しました。これまでは、新規の楽曲や方法を用いた活動に対して、対象児が戸惑いや拒否反応を見せる様子があり、対象児の意思表出の読み取りが難しいことが多くありました。しかし、私が関わりを始めた際には、新規のかかわり手や楽曲への戸惑い等はほとんど見られず、自らの意思で好きな楽曲を選択でき始めている兆しがうかがえました。そこで本研究では、対象児の好みの音楽に対する選択行動について、これまでの同活動の結果と比較しながら分析をしました。その結果、新規の楽曲を用いた活動であっても、好みの楽曲が流れるスイッチを連続して押下するといった意思表出を

通して、楽曲を選択している様子が見られました。また、スイッチの位置に関わらず、特定の楽曲に偏向した選択が増加するという、明確な意思表出が見られたことから、要求表出の達成段階が「選択による初期的要求表出」から、「選択による要求表出」に到達したと考えられました。対象児の意思表出がより明確になったことによって、かかわり手がその意思をより正確に読み取り、より適切な応答を返すことができるようになるという相互作用が生じたと考えられました。本研究では、対象児の行動を中心に分析を行ってききましたが、今後はこれまで計測してきた生理指標を用いて、対象児の内的反応と観察された行動との関係性について検討していきたいと考えています。

末筆になりますが、拙い発表にも関わらず、選考委員会の先生方をはじめ、たくさんの方が足を運んで下さり、大変嬉しく思いました。自分の発表に時間を割いていただき、貴重なご助言をいただき、深く感謝申し上げます。本大会で得た多くの学びを生かし、重度・重複障害のあるお子さんの理解や支援の広がりにつながるよう、これからの研究にも尽力したいと思います。この度は誠にありがとうございました。

発表演題：重度・重複障害児における意思表出の形成に関する事例的検討

# 第63回大会大会企画特別講演・シンポジウム報告

## 特別講演 ミライとつながる技術

企画者：勝二 博亮 (茨城大学)

司会者：勝二 博亮 (茨城大学)  
田原 敬 (茨城大学)

話題提供者：本多 達也 (富士通株式会社)  
五十嵐祐二 (ソフトバンク株式会社)

座談会登壇者：本多 達也 (富士通株式会社)  
五十嵐祐二 (ソフトバンク株式会社)  
勝二 博亮 (茨城大学)  
新井 英靖 (茨城大学)

### 1. 企画趣旨

近年の科学技術の発展により、様々な障壁を乗り越える革新的な技術が次々と生み出されている。これらの新しい技術は、私たちの身の回りの生活を便利にするだけでなく、社会をより良くするための変化をもたらす可能性を秘めている。

そこで本講演では、ソーシャル・イノベーションやAIエンパワーメントの最前線で活躍する2名の講師をお招きし、その取り組みと未来への展望について講演が行われた。講演後は特別支援教育を専門とする研究者を交えた公開座談会を行い、障害のある方や子どもを取り巻く日本社会および教育のあり方について議論した。

### 2. 話題提供の要旨

#### (1) 音を届け、人をつなぐ技術：Ontennaの開発より (本多達也)

本多氏からは、音を振動と光に変換するデバイス「Ontenna」の開発経緯と活用事例について報告された。支援技術の開発において当事者との協働が重視される中、大学時代にろう者と出会い、手話を学ぶ中で「音を伝えたい」という思いから研究を開始し、現場の声を反映した改良を重ねながら製品化を実現した。こうしたユーザー中心の開発プロセスにより、現在、全国の聾学校の8割以上で導入され、音楽の授業でのリズム学習や発話練習などに活用されている。また、聴覚障害者と聴者が「共に楽しむ」体験をデザインするという視点から、映画や狂言、スポーツ観戦などエンターテインメント分野での実証実験も進められている。さらに、子どもたちとの共創により開発された「エキマトペ」（駅の音を

AIでリアルタイムに視覚化するシステム）や、香川県の豊島で聾学校の生徒と地元中学生が共にアート鑑賞を行ったワークショップなど、子どもたち自身が共生社会の担い手となる実践が報告され、支援技術が「与えられるもの」から「共に創るもの」へと転換しつつあることが示された。

#### (2) 生成AI活用で広がる特別支援教育の可能性 (五十嵐祐二)

五十嵐氏からは、生成AIが特別支援教育にもたらす可能性について報告された。冒頭で会場に「生成AIを仕事で使いたいか」と問いかけたところ半数以上が積極的に回答したが、国際比較では日本は消極的な割合が高い国であることが示された。こうした現状を踏まえ、「好む好まざるに関わらずAI時代はやってくる」という前提のもと、教育現場がAIとどう向き合うかが重要であると述べられた。具体的な活用例として、GoogleのノートブックLMで作成した動画が上映され、AIが生成したコンテンツをAIの音声で説明するツールが、すでに教育現場で活用可能な段階にあることが示された。未来予測として、5年後にはマルチモーダルAIの普及により教材・校務の自動化が進み、10年後には教師の役割が「知識の伝達者」から「学びの支援者」へと変化するとの見通しが示された。AIの急速な進化が予測される中、特別支援教育においても、その可能性と限界を見極めながら活用を進めていく必要性が提起された。

### 3. 座談会の要旨

座談会では、技術と人間の関係について多角的な議論が展開された。勝二氏は本多氏の講演について「機械だ

けれど、その裏側に人が見える」と評し、教材開発においても「支援する」だけでなく「一緒に楽しむ」という姿勢の重要性を指摘した。本多氏は、大学時代にろう者と生活を共にした経験から「どれだけ関わってもその人にはなれない」という実感を語り、だからこそ「一緒に楽しめる」場のデザインへと関心が向かったと応じた。AIの活用については、五十嵐氏から「AIは答えを出す道具ではなく、問いを重ねて学びを深める道具」という本質的な使い方が提案された。一方で本多氏は「考える力が衰えている感覚がある」と率直に述べ、技術への依存がもたらす負の側面についても言及があった。新井氏からは、障害のある方を起点とした技術が社会全体を変革する可能性について言及があり、デジタルトランスフォーメーションの本質など、技術を介した共生のあり方について議論を深

めた。

#### 4. まとめ

本講演では、Antennaや生成AIといった先端技術が特別支援教育にもたらす可能性と課題について、開発者・実践者の視点から報告された。技術は教員の代わりになるものではなく、教員が子どもと向き合う時間を生み出し、一人ひとりの可能性を引き出すためのパートナーとして位置づけられた。AIの普及により「考える力の衰え」への懸念も示されたが、だからこそ多様な他者との対話や共創の重要性が確認された。今後は、技術を「使いこなす」だけでなく、「様々なつながり」が生み出す共創を通じて、「違いを知り、共に楽しむ」社会の実現に向けた取り組みが期待される。

## 準備委員会企画シンポジウム 1 学校を超えた居場所づくり：聴覚障害児支援から考える多様な連携のかたち

企画者：田原 敬・井口亜希子（茨城大学）

司会者：田原 敬・井口亜希子（茨城大学）

話題提供者：片岡 祐子（岡山大学病院聴覚支援センター）

高野恵利那（NPO法人みみトモランド）

竹本 真悟（一般社団法人SOCIAL DESIGNERS FOR D.）

指定討論：澤 隆史（東京学芸大学）

### 1. 企画趣旨

インクルーシブ教育システムの構築が進展する中、聴覚障害児の教育環境は多様化の一途を辿っている。通常の学級に在籍する聴覚障害児が増加する一方で、聾学校の在籍者数は継続的な減少傾向を示している。通常の学級に在籍する聴覚障害児においては、学業成績上の問題を呈さない場合であっても、障害特性に対する周囲の理解不足により心理的孤立を経験する事例が報告されている。また、手話を第一言語とする聴覚障害児においても、聾学校の在籍児童生徒数の減少や統廃合により、同年代の手話使用者との日常的な交流機会が制限されるなど、心理的安定を求めるための居場所が減少してきている。

そこで本シンポジウムでは、専門教育機関外で聴覚障害児者との接点を多く有し、様々な領域を超えて支援活動を展開している3名から話題提供をいただき、学校を超えた居場所づくりや、多様な連携のあり方について検討した。

### 2. 話題提供の要旨

#### (1) インクルージョンの根幹：医療者視点からみる聴覚障害児育成に必要なマインドセット（片岡祐子）

片岡氏からは、耳鼻咽喉科医師として聴覚障害児の診断・治療に従事する中で、専門教育機関では把握されていない聴覚障害児の実態や保護者の悩みに触れてきた経験が報告された。医学的視点のみでは解決に至らない問題への対応として、聴覚障害児の理解促進を目的としたパンフレット作成や、新生児聴覚スクリーニング検査、聴覚障害児支援中核事業など、様々な支援体制の確立に従事してきたことが紹介された。医療現場から見た医療と教育の連携による、聴覚障害児の卒後まで見据えた切れ目ない支援の在り方や、教育にできること・教育がやるべきことについて述べられた。

#### (2) 難聴で看護師の私の生きづらさと工夫：未来へとつなぐ難聴支援の在り方を考える（高野恵利那）

高野氏からは、中等度難聴当事者として学校生活や看

護師として働く中で様々な葛藤を抱えてきた経験が報告された。同じような障害・悩みを抱える仲間がいなかったことから、聴覚障害者同士が気軽に交流できる場の必要性を認識し、メタバースを活用した聴覚障害者の交流サービスの運営に至ったことが紹介された。本サービスは、家庭や学校、職場とは異なる「サードプレイス」として、孤独を感じる聴覚障害当事者の交流の場として機能していることが述べられた。

### (3) ろう・難聴児の言語アクセスと居場所を地域でつくる (竹本真悟)

竹本氏からは、重度聴覚障害当事者として聴者中心の社会の中で生活してきた後、大学で手話と出会った経験が報告された。その後、自身に聴覚障害のある子どもが生まれ、手話を中心とした子育てを行う中で、手話を必要とする子どもの居場所が少なく、都市部に集中しているという課題を認識したことが紹介された。こうした課題を背景に、地方自治体との交渉を重ねながら、地域において手話を使用する聴覚障害児やその家族が集まることのできるイベント等の企画・運営に取り組んでいることが述べられた。

#### 3. 指定討論の要旨

指定討論者の澤氏は、以上の話題提供に加え、聴覚障

害児が抱える様々な問題や、子どもにとっての「居場所」の定義について整理した上で、聴覚障害児教育の専門的見地から討論を行った。その後指定討論者からの質疑を軸に、各話題提供者が様々な機関と「つながる」ために重要な観点について述べる形で討議を行い、聴覚障害児にとっての居場所づくりには聴覚障害への理解と関わるためのスキル、学校における学びと心の連続性、地域ごとの連携における「公」と「民」をつなぐ仕組み、遠隔での交流の活性化などが重要であることが確認された。特に、専門教育機関と地域社会資源との有機的連携による包括的支援システムの在り方と、令和期における支援体制の今後の展望について議論が深められた。

#### 4. まとめ

本シンポジウムでは、医療者、当事者、保護者という多様な立場から、学校を超えた居場所づくりの実践が報告された。通常の学級に在籍する聴覚障害児の心理的孤立や、手話を第一言語とする子どもたちの交流機会の減少といった課題に対し、地域社会全体での包括的支援体制の構築が不可欠であることが示された。今後は、専門教育機関と地域社会資源との連携を強化し、すべての聴覚障害児にとって心理的安全性が確保された居場所の創出が期待される。

## 準備委員会企画シンポジウム 2 青年期・成人期の学びを問い直す

### —知的障害者に対する高等部のキャリア教育と成人期の学び—

企画者：新井 英靖 (茨城大学)

司会者：窪田 知子 (滋賀大学)

話題提供者：市川 純 (茨城大学教育学部附属特別支援学校)

船橋 秀彦 (シャンティつくば)

指定討論：湯浅 恭正 (高松大学・非常勤)

#### 1. 企画趣旨

知的障害児教育では、従前から卒業後の生活に必要なスキルを獲得することが求められてきたが、その一方で、特別支援学校が職業準備教育だけに終始することに対する批判や、生涯にわたって学びを継続することの重要性についても指摘されてきた。こうした青年期の学びのあり方については、生涯学習が重要視される現代において議論を深めていくことが必要な課題である。そこで、本

シンポジウムでは、知的障害特別支援学校の高等部段階におけるキャリア教育の実践と、知的障害児の卒業後においても青年期の学びを続けているシャンティつくばの取り組みを報告した上で、学校教育と卒業後の学びをつなぐことの意義とその方法について議論した。

#### 2. 話題提供の要旨

##### (1) 高等部における「キャリアの時間」の実践 (市川純)

市川氏からは、茨城大学教育学部附属特別支援学校

高等部の実践を中心に生涯学習につながるキャリアの時間の取り組みについて紹介があった。そのなかで、社会に適應するための学習ではなく、生徒が社会を創り出していくことができるように授業を展開していくことが重要であると指摘された。

## (2) 生活の豊かさにつながる青年期の学び (船橋秀彦)

船橋氏からは、シャンティつくばの取り組みを中心に報告があり、そのなかで、学生(シャンティつくばの利用者)が自ら企画して、小旅行に出かける取り組みなどが紹介された。こうした取り組みを通して、青年期においては自己形成や価値づくりの重要性が指摘された。

## 3. 指定討論の要旨

指定討論者は両報告を受けて、青年期の活動は、単に興味のある活動に参加すれば良いのではなく、関係する

当事者の存在の承認や、他者と自己の関係性を「生き方」という点から問いかけることが重要であると指摘した。創造する共同の場づくり＝キャリア支援が未完の課題であるインクルージョン社会の形成に結びつく実践の展開が求められていると指摘した。

## 4. まとめ

本シンポジウムでは、高等部から青年期にかけての実践を通して、主として知的障害のある青年の自分づくりと社会形成の関係性について検討した。フロアからは、青年期には独自の課題や実践があるので、それらをふまえた検討が必要であるという発言もあり、今後、そうした視点からさらに深めていく必要がある研究課題であると感じた。

## 準備委員会企画シンポジウム3 アクセシブルな教科書及び教材提供の現状とこれから

企画者：藤芳 明生 (茨城大学)

司会者：細川美由紀 (茨城大学)

話題提供者：田中 良広 (帝京平成大学)

河村 宏 (DAISY コンソーシアム)

長田 江里 (東京大学先端科学技術研究センター)

指定討論：藤芳 明生 (茨城大学)

### 1. 企画趣旨

様々な理由で一般的な教科書や教材を利用できない児童生徒に向け、最初からアクセシブルな設計にする取り組みや、適切な形式に作り直す取り組みは続けられているが、解決すべき課題も多い。教科書バリアフリー法により、文部科学省が拡大教科書や音声教材の作成を支援するようになったが、十分とは言えない。テストやドリル、参考書などの教科書以外の教材については、統一された支援体制がない状態である。そこで本シンポジウムでは、必要とされる教材に先生や子どもたちが適切に「つながる」には何が必要かについて考える機会とした。

### 2. 話題提供の要旨

#### (1) 特別支援教育の視点から考える教材のあり方

(田中良広)

田中氏からは、特別支援教育における教材の在り方に関して、情報保障、供給体制、意識改革の3点から提案

がなされた。1点目の情報保障の例として、地図や写真、グラフ等の文字以外のコンテンツに対する情報保障について紹介がなされた。これらのコンテンツに解説文を付加することによりアクセスが可能になる。2点目の供給体制に関しては、教科書等のデジタルデータがニーズに応じたフォーマットに変換できるデータ形式になっている必要があり、国と教科書発行者が共同で管理するデータ管理機関を創設することが望ましい。3点目の意識改革については、アクセシブルな教材を利用する児童生徒に必要とされるICTスキルについて紹介された。今後はこれらのスキルを用いて、必要な措置を自らが講じようとする姿勢を身に付けていくことが重要であると述べられた。

#### (2) アクセシブル教材の国際動向と日本の課題 (河村宏)

河村氏からは、これまでアクセシブル教材におけるアクセシビリティを支える標準技術の国際共同開発に参画

してきた立場から話題提供がなされた。DAISYおよびアクセシブルなEPUBいずれにおいても、WCAG（障害の有無や環境によらず、誰もがウェブ上の情報にアクセスし、利用できるようにするための国際的なガイドライン）を常に参照してその技術仕様を定義しており、教科教材や試験などをWCAGに沿って作成・提供することで、視覚・聴覚障害者や学習に困難を抱える生徒も円滑に情報にアクセスする機会が増すことが期待される。そのため、日本においても教科書バリアフリー法によってすべての教科書出版者に提出が義務付けられているデジタルデータのフォーマットを見直すことにより、更に質の高い教材を容易に製作できるような仕組みを早急に整備する必要があることが述べられた。

### **(3) 教科書デジタルデータ管理機関 AEMC の現状と課題（長田江里）**

長田氏からは所属するAEMC (Accessible Educational Material Center) の取り組みや、AEMCにおけるデジタル教材製作の流れについて、米国のNIMAC (National Instructional Materials Access Center) との比較も交えながら紹介がなされた。NIMACでは出版社から国レベルで標準規格化されたNIMASファイルを受け取り、それらを教材製作団体等へ提供している。一方AEMCにおいては、出版社からPDFを受け取り、それらをテキスト、EPUBファイル等、教科用特定図書等を作製可能なフォーマットに変換した後、教材製作団体へ提供している。このように、日本にお

ける教科用特定図書等を製作するための法整備は十分であるとはいえず、これらが必要な児童生徒のもとへ円滑に提供するためには、紙の教科書と同じタイミングで届く仕組みを整備することが重要であると述べられた。

### **3. 指定討論の要旨**

指定討論では、小・中では発達障害の児童生徒からアクセシブル教科書の提供希望が増加しているのに対し、高校では希望者が極端に少ないのは何故かについて、議論を行った。話題提供者から、「高校では教科書以外の教材の活用が増え、現行制度は高校生のニーズにできていないのではないか」、「高校生はツールを活用し、必要ところは自分で工夫して読んでいと推察する」、「音声教材等を必要とする高校生は進学自体を諦めている可能性がある」等の回答があり、アクセシブルな教材提供に関する制度改革の必要性を再認識することとなった。

### **4. まとめ**

本シンポジウムでは、アクセシブルな教科書および教材作成に関する国際的動向ならびに日本における現状が紹介された。今後、アクセシブルな教材と、それらを必要とする児童生徒が「つながる」には、国際的なガイドラインを踏まえた「ボーン・アクセシブル」に向けての取り組みが重要であることが示された。また、これらの教材を活用するためのICTスキルを児童生徒らが獲得することも「つながる」上では重要な視点であり、教員としてできることは何かについても議論が拡がることが期待される。

## 準備委員会企画シンポジウム4 障害児の命と学びを守る特別支援学校の防災機能

企画者：新井 英靖 (茨城大学)

司会者：堤 英俊 (都留文科大学)

話題提供者：松本 学 (石川県教育委員会)  
新井 英靖 (茨城大学)

指定討論：鈴木 裕庸 (日本福祉大学)

### 1. 企画趣旨

日本では、近年、大地震や集中豪雨などにより、各地で避難所を長期に開設する災害が多く発生している。制度的には福祉避難所を設置することができ、障害者をはじめとした災害時要援護者は避難所で配慮や支援を受けられるように障害種別のパンフレットなどが多く刊行されている。しかし、実際のところは、障害児・者が避難所に入ることができず、発災してから数日間、車中で過ごしたなどといった報道も多く見かける。こうした現実を改善していくためには、特別支援学校は平時からどのような準備をしておくことが必要なのだろうか。本シンポジウムでは、2024年1月に発生した能登半島大地震発災後の特別支援学校の対応について当時、教育委員会で状況把握と対応に検討していた松本氏から報告していただく。その上で、「保護者が求める障害者の避難所と特別支援学校の取り組み」について新井より調査結果を報告することで、特別支援学校の防災機能と防災教育のあり方について検討した。

### 2. 話題提供の要旨

#### (1) 能登半島大地震における特別支援学校の対応 (松本学)

松本氏からは、能登半島地震の際に特別支援学校がどのような被害を受け、教育活動を再開するまでの過程が報告された。その中で、すぐに再開することができなかった特別支援学校もあり、一時的に別の特別支援学校に通

う子どももいたことも報告された。松本氏からは、こうした一連の対応を経験して、平時からの準備がとても重要であると指摘された。

#### (2) 保護者が求める障害児の避難所と特別支援学校の 防災機能 (新井英靖)

新井氏からは、障害児の保護者調査を実施し、その結果、障害児とその家族は、避難所で生活するためには、電源や医療機器の確保だけでなく、障害に対する周囲の理解が必要であると考えていたことを報告した。こうした結果を受けて、平時からの理解啓発が大切であるとともに、障害児とその家族が安心して生活できる福祉避難所の整備も重要であることを指摘した。

### 3. 指定討論の要旨

指定討論者は両報告を受けて、ソーシャルワークの視点から「つながり」の重要性を指摘した。また、型を作れば安心して障害児とその家族が避難できるのではなく、その地域の特徴や、その場にいる人の関係性のなかで避難所を運営していくことが重要であることを指摘した。

### 4. まとめ

本シンポジウムでは、知的障害や発達障害に焦点をあてて検討したため、自閉症などの特性をふまえた避難所のあり方が議論された。その中で、子どもが学校にいる時間は教員が子どものそばにいるが、登下校中に災害が発生したときなど、多様な場面を想定して避難計画が必要であることがみえてきた。

## 準備委員会企画シンポジウム5 知的障害児の「深い学び」を生み出す授業づくり —教科学習と自立活動の実践から—

企画者：新井 英靖 (茨城大学)

司会者：新井 英靖 (茨城大学)

話題提供者：井上 幸 (石川県立いしかわ特別支援学校)

穴戸 佳代 (茨城大学教育学部附属特別支援学校)

中谷 洋文 (高知県立中村特別支援学校)

指定討論：吉田 茂孝 (大阪教育大学)

### 1. 企画趣旨

現行の学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びを実現する授業を提供するとともに、知的障害児に対する教科学習と自立活動の授業を行うことが求められている。これに対応するべく知的障害特別支援学校では、全国的に授業改善が進められているが、実践的にはいろいろな課題が浮上している。たとえば、知的障害児に対する教科学習では、どのような授業を展開すれば知的障害児の「深い学び」につながるのか、豊かな生活につながる教科学習とはどのようなものか検討する必要がある。また、知的障害児に対する自立活動では、障害による学習上・生活上の困難を改善・克服するための課題を明確にできても、それを「自立」に向けて主体的に活動することができる授業づくりをどのように展開するかという点もこれまで十分に検討されてこなかった。そこで、本シンポジウムでは、こうした知的障害児教育の実践課題を克服する授業づくりのあり方について検討した。

### 2. 話題提供の要旨

#### (1) 知的障害児の深い学びにつながる教科学習

(井上幸)

井上氏からは、知的障害児が国語や算数・数学の授業に主体的に取り組めるように、「やってみたくなる活動」を生み出し、そのなかに「教師の指導性」を加えて授業づくりの方法が報告された。そのなかで、教科の本質をつかみ、それを子どもの興味と統合できる教材開発が重要であるとの指摘がなされた。

#### (2) 知的障害児の豊かな生活につながる体育科の授業づくり (穴戸佳代)

穴戸氏からは、知的障害児の体育の授業づくりについて報告された。その中で、ストーリーのなかで自然と体を動かしたり、ボールを投げたりすることができる教材を用意し、児童が楽しく活動しながら、体育科の「ねらい」を達成できるようにすることが重要であるとの指摘がなされた。

#### (3) 知的障害児の「時間における自立活動」の授業づくり (中谷洋文)

中谷氏からは、児童生徒の実態をもとに、身体／社会性／言語・コミュニケーションの3つのグループに分けて自立活動の授業の方法が紹介された。そこでは、楽しく活動できる教材開発とともに、障害特性を教員自身が捉えて、困難の背景をふまえた指導ができるように教師の力量を高めていくことが必要であるとの指摘がなされた。

### 3. 指定討論の要旨

指定討論者は3つの実践報告を受けて、教育方法学の視点から集団による学びの重要性と、教師の指導的意図をもって関わることの重要性を指摘した。

### 4. まとめ

本シンポジウムは、現行の学習指導要領が教科中心の教育課程にシフトしたことを受けて、全国的な取り組み状況を確認する機会となった。その中で、深い学びを実現するために、教科学習や自立活動の授業においても、子どもたちが楽しく、主体的に活動することができるように授業を設計することが重要であることが示唆された。

## 準備委員会企画シンポジウム6 特別支援教育における生理機能評価の意義 —子どもの内面と「つながる」生理データの活用—

企画者：勝二 博亮 (茨城大学)

司会者：勝二 博亮 (茨城大学)  
田原 敬 (茨城大学)

話題提供者：宮地弘一郎 (信州大学)  
石田 基起 (滋賀大学)  
竹内 博紀 (茨城県立下妻特別支援学校)

指定討論：勝二 博亮 (茨城大学)

### 1. 企画趣旨

科学技術の進展にともない、さまざまな生体機能の計測がリアルタイムで容易に行えるようになり、従来は実験室でしか使用できなかった生理機能評価が、教育実践の場でも応用可能になりつつある。とりわけ、重度・重複障害児の中には、教師の働きかけに反応がみられない、あるいは反応があっても微弱で不安定な事例があることから、生体情報を活用して子どもの実態を探る試みは有用であると考えられる。

そこで、本シンポジウムでは、特別支援教育の現場において生理機能評価を積極的に活用している3名の実践的研究者を話題提供者として迎え、これまでの取り組みを紹介していただいた。宮地氏は研究者として、石田氏は教員としての経験をもつ研究者として、そして竹内氏は教員として、それぞれの視点を「つなぎ」、子どもの内面と「つながる」生理データの活用の意義について議論を深めた。

### 2. 話題提供の要旨

#### (1) 生理心理学的アプローチによる反応不明瞭児の心理的生活実態把握 (宮地弘一郎)

宮地氏からは、反応不明瞭な重症児を対象に、主に心拍指標を用いた生理心理学研究について話題提供が行われた。まず、実験的視点から環境分析し、複雑な日常場面を変数として捉えることで、生理機能評価は個人モデルから社会モデルになることを紹介した。次には、対象の生活や文脈を前提として、周囲の人の日常的なかかわりに着目し、かかわりの感覚モダリティや「間」の分析と心拍測定とを組み合わせた研究を概説した。とりわけ、反応不明瞭な重症児への日常的なかかわりが子どもにもたらす効果について生理心理学的アプローチによってうかがい知ることができることを紹介した。

#### (2) サーモグラフィによる情動的反応の可視化 (石田基起)

石田氏からは、自身の特別支援学校教員としての実践経験を起点に、教育現場における生理機能評価の可能性について、反応が微弱かつ不随意であることの多い超重症児の情動状態の評価について報告された。超重症児への教育的対応中に得られたサーモグラフィによる鼻部皮膚温と心拍の対応関係から、不快な刺激の傾向や、快の兆しと捉えられる反応が確認されたことを紹介した。かつては専門技術者のみが扱う特殊な機器であったサーモグラフィも、近年の小型化・低価格化により、日常的に活用できるツールとなりつつある。現場の教員が、子どもの内面世界を見逃さず、関係性のきっかけとして生体情報を捉え直す意義について述べられた。

#### (3) 重度・重複障害児に対する視線入力装置を活用した指導及び評価方法の検討 (竹内博紀)

竹内氏からは、特別支援学校教員としての実践をもとに、重度・重複障害児に対する視線入力装置を活用した指導および実態評価の可能性について報告された。近年、視線入力装置の低価格化や視線入力アプリの普及により、特別支援学校において視線入力を活用する環境が整いつつある。動きに制限のある重度・重複障害児に対して、視線入力装置を用いた活動は主体性を引き出すとともに、視線による反応から子どもの実態を捉える手がかりとなることが示された。一方で、視線の動きを本人の意図として過度に評価してしまう危険性も指摘され、生理学的知識を踏まえた慎重な解釈が必要であることが述べられた。

### 3. 指定討論の要旨

指定討論者はこれまで障害のある子どもの実態に迫るために、生体機能評価の可能性を模索してきた。以上の話題提供をふまえ、話題提供者に壇上へあがっていた

だき、特別支援教育における生理機能評価の意義やその適用に関する今後の可能性などについて、総合討論を行った。生理機能評価が身近になったことで、行動評価ではうかがい知れない子どもの実態に迫れる点で有効であることが確認できた。その一方で、生体現象を容易に数値化・可視化できるようになったことで、十分な知識をもたずに解釈することの危険性についての言及もあった。

## 準備委員会企画シンポジウム7 発達障害と愛着障害（アタッチメント）の「あいだ」の理解と支援

企画者：新井 英靖（茨城大学）

司会者：新井 英靖（茨城大学）

話題提供者：金丸 隆太（茨城大学）

江原 勝久（社会福祉法人 同仁会つくば香風寮）

渡邊 鮎美（茨城県立高萩高等学校）

舟生 心（茨城県立友部東特別支援学校）

### 1. 企画趣旨

小・中学校では、発達障害の疑いとして相談に上がるケースの中に、一定の割合で虐待等から生じている愛着（アタッチメント）障害と思われる子どもがいる。これらのケースは、発達障害と似通った状態を示すことも多く、その区別はとても難しいため、学校現場では「発達障害」として対応を進めているところも多いのが現状である。それでは、発達障害と愛着（アタッチメント）障害の共通点・相違点はどこにあるのだろうか？ また、愛着（アタッチメント）障害の子どもにはどのように学校や施設は対応していけば良いだろうか？本シンポジウムでは、従前の特別支援教育の枠組みを「超えて」、臨床心理学や児童相談所の対応などを紹介しながら、情緒不安定な子どもへの対応方法について検討した。

### 2. 話題提供の要旨

#### (1) 愛着（アタッチメント）障害の理解と支援（金丸隆太）

金丸氏からは、「アタッチメント」の定義と支援方法の基本に関して、「安心—不安」と「接近—回避」という2つの軸から報告された。もともと、愛着（アタッチメント）の問題がある子どもが神経発達症（発達障害）と間違われやすいが、様々な個性を持つ子ども達の支援を、従前の特別支援教育の枠組みに当てはめるのではなく、学校

### 4. まとめ

本シンポジウムでは、心拍や皮膚温、視線といった生体情報を活用することで、従来の行動観察だけでは見えにくかった子どもの内面や主体性に迫る手がかりが得られることが示された。一方で、生理データの解釈には専門的知識が必要であり、過剰な評価や誤解の危険性も指摘された。今後は、現場教員の実践経験と研究的視点を統合し、特別支援教育における生理機能評価のさらなる発展的活用が期待される。

現場では、枠や型を超えた対応が必要であることが指摘された。

#### (2) 虐待を受けた子への心理支援的ケア—児童養護施設における実践（江原勝久）

江原氏からは、児童養護施設に入所している被虐待児の実態と施設での対応について、実践的に報告された。そのなかで、虐待を受けた子どもたちの心の回復を支援することが必要であり、施設では安心感を育むために、「温かい雰囲気」をつくり、子どもたちが安全だと感じられる暮らしを提供していることが報告された。こうした施設をつくるために、職員間で子どもの気持ちについて話し合い、子ども理解を深めていくことが重要であることが指摘された。

#### (3) 子どもが安心して通える学校づくり—病弱特別支援学校の実践から—（渡邊鮎美・舟生心）

舟生氏からは、茨城県の病弱特別支援学校の現状と学校として心がけていることが報告された。また、渡邊氏からは、子どもに安心感をもってもらえる「学校づくり」や「学級づくり」の方法について実践的に報告された。そのなかで、子どもたちが安心して「今日も学校に行きたい」と思えるような雰囲気や環境づくり、「受容的な学校文化」を作ることが重要であることが指摘された。

### 3. まとめ

本シンポジウムは、小・中学校のなかでも増加傾向にある情緒不安定な子どもへの対応方法にも通じる内容であった。3氏からの報告に共通していることは、子どもに居場所に対する「安心感」をどのようにもってもらえるか、

という点であった。シンポジウムでは、これを実現するために、困難を抱えた子どもの関係づくりが大切であることに加えて、施設や学校全体の「雰囲気づくり」や「学校文化」といった視点をもつことが重要であるという点が共有された。

# 研究奨励賞・実践研究賞受賞コメント

## 第37回研究奨励賞

### 第37回研究奨励賞を受賞して

木村 芽生 (神戸家庭裁判所 (研究時所属 兵庫教育大学大学院学校教育研究科))

この度は、研究奨励賞という大変名誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。受賞を大変うれしく思うとともに、身に余る思いで一杯です。大学院卒業後、日々の臨床に追われる中で、とても励みになりました。本論文の共著者である池田浩之先生は、大学院時代のゼミの指導教員であり、本研究を進めるにあたって大変お世話になりました。ゼミの先輩、同期、後輩にも貴重な意見をたくさんいただきました。そして、研究協力者の方々は、貴重な経験を丁寧にお話ししてくださいました。この場をお借りして、本研究にお力添えいただいた全ての方々に、心より感謝申し上げます。

私自身は、大学時代から、障害や重い病気のある同胞がいるきょうだいへの支援について、関心を持つようになりました。きょうだいは生きていく中で、家族のことでがまんをしたり、年齢以上の頑張りを求められたりする場面があるのではないかと考えたからです。ただ、きょうだいについて学んでいるうちに、きょうだい自身が支援の必要性を一概に感じているとは言えないこと、きょうだいによって体験は様々であり、同胞の存在によって障害に関する考え方が深まるなど、きょうだい自身の成長にもつながることがあり、つらい体験ばかりではないことなどに気付くようになりました。また、同胞の特性によって、きょうだいの体験に違いが出るといった研究結果に関心を持ち、周囲からは困難さが見えにくい部分がある自閉症スペクトラム障害のある同胞のいるきょうだいの体験に、焦点を当てることにしました。さらに、アイデンティティを模索していく青年期において、きょうだいは自分の経験をどのように振り返り、障害についてどのような価値観を築いていくのかを明らかにしたいと思いました。そして、このようなきょうだいの状況を多面的に捉えて、きょうだい支援の在り方について検討したいと考えました。

本研究では、質的研究法であるTEM (複線経路・等至性モデル) を用いて、研究協力者3名 (自閉症スペクトラム障害のある同胞のいる青年期のきょうだい) の経験を分析

し、きょうだいが同胞の障害を理解するプロセスや、そのプロセスに影響を与えた要因を明らかにすることを目的としました。その結果、同胞の障害に関する経験は三者三様であることはもちろんのこと、きょうだいが周囲の障害に対する理解など社会的な影響を受けてきたこと、つらい体験をしたきょうだいも青年期には自身の体験を俯瞰したり統合したりして、家族や社会に対する自分なりの価値観を見出していたことが明らかになりました。また、支援の必要性の感じ方も、きょうだいによって違いがあった状況もうかがえました。本研究には研究協力者の人数など課題はありますが、本研究が、読んでくださった方々のきょうだいへの理解を深める一助となったり、きょうだいに関する今後の臨床や研究の発展に少しでも寄与できたりすることを願っています。

最近、テレビやインターネットで見たニュースの中で、水族館や美術館を、障害のあるお子さんたちとその家族のためだけに、市や施設が一定の時間帯を貸し切り、周囲に気兼ねすることなく過ごしてもらえるようにする取り組みが紹介されていました。取り組みについて様々な意見はあると思いますが、同胞の障害のことで、外出が思うようにできなかったり、周囲の反応が気になったりしているきょうだいがいるとすれば、そのきょうだいにとっては安心して楽しめる特別な時間になったかもしれません。このように様々なアイデアを持ち寄り、障害のある方々もその家族も、伸び伸びと過ごせる社会になればいいなと個人的には思っています。

最後になりましたが、この度は貴重な機会を頂き、誠にありがとうございました。臨床や研究のさらなる発展に向けて、私自身も、微力ながら、日々精進して参りたいと思います。

**受賞論文：自閉症スペクトラム障害のある者のきょうだいが同胞の障害を理解するプロセス**

**—青年期のきょうだいの語りを通して—**

**掲載巻号：「特殊教育学研究」第62巻 第2号**

## 第22回実践研究賞

## 第22回実践研究賞を受賞して

伊藤 功(北海道星置養護学校ほしみ高等学園)

この度は、第22回日本特殊教育学会実践研究賞という栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。本実践研究を進めるにあたり、ご指導いただきました北海道教育大学函館校の青山真二先生、並びにご協力いただきました学校関係者、そして研究に参加して下さった対象生徒と保護者の皆様に、心より感謝申し上げます。

本研究では、知的障害を伴う自閉スペクトラム症生徒1名を対象に、学校生活の中で頻繁にみられていた廊下歩行時の壁蹴り行動の改善を目指しました。対象生徒は歩行を含めた身体の動きを上手くコントロールすることが難しく、学校場面において様々な困難を抱えていました。特に校内での教室移動が負担となり、イライラして物を投げたり、掲示物を破ったりするなどの不適切な行動もみられ、授業になかなか参加できないこともありました。廊下歩行中に、壁に引き寄せられるように近づき、頻回に壁を蹴る行動がみられており、これらの行動の改善が自己効力感の向上につながると考えられ、QOL向上のための重点課題として取り組みました。

指導の初期段階では身体プロンプトを用いて廊下中央を歩行するように支援し、その後、支援の量を段階的に減らしながら、トークン・エコノミー法を導入しました。こうして、本人の動機付けを高めることで、廊下を歩行する行動自体が、目的をもった行動に変容し、壁を蹴らずに歩行できるようになりました。また、これまで壁を蹴らないこと、

遅れずに歩くことなど、教師から注意されてネガティブなフィードバックを受けることもあった対象生徒が、全指導期において壁を蹴らないで歩くことができている状態を、言語的な賞賛により分化強化され、教師による肯定的な評価を受け続けたことが、意欲や自己効力感の向上にもつながったと考えられました。最終的には、壁を蹴らずに一人で歩くことができるようになっただけでなく、社会的妥当性の結果からも、対象生徒のQOLの向上につながったことが示唆されました。授業への参加が増え、クラスメイトとの関わりも広がるなど、歩行指導が対象生徒の学校生活に良い影響を与えたことが確認されました。

本研究を通して、対象生徒が日々成長し続ける姿を間近でみられたことが、何よりの喜びでした。また、その頑張りを実践研究という形でまとめられたことを、大変うれしく思っております。

本研究は一事例ではありますが、行動コントロールの困難さに直面する生徒への支援方法を具体的に示すことができましたと考えています。本研究が、特別支援教育の実践に携わる先生方にとって、何らかのかたちでお役に立てれば幸いです。

**受賞論文：知的障害を伴う自閉スペクトラム症生徒の歩行時の壁蹴り行動に対する指導方法の検討**

**掲載巻号：「特殊教育学研究」第62巻第1号**

# 編集後記

ニューズレター編集チーム：一木 薫 (福岡教育大学)・滝川 国芳 (京都女子大学)

ニューズレター第9号は、大会特集でした。第63回大会は、「つながる・超える・生み出す 新しい特別支援教育を目指して」をテーマに、開催地の持ち味を随所に生かした形で開催されました。次回、第64回大会は、本大会としては20年ぶりの神戸の地での開催となります。大会準備委員長の井澤信三先生 (兵庫教育大学) を中心に、大

会テーマ「特別支援教育のこれまでとこれから～未来をえがく・つくる・かんがえる～」のもと、準備が進められています。秋の大型連休中の開催となりますので、今後、大会HP等で発信されます企画内容等を適宜ご確認の上、お早めにご予定を立てていただけるとよいかと存じます。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

---

ニューズレター編集チーム

担当理事 (総務)：一木 薫 (福岡教育大学)・滝川 国芳 (京都女子大学)

2026年3月4日

---